



仲 町 葵

まだ九月半ばだというのに夕方は肌寒い。三か月前まで都会で暮らしていた久人<sup>ひさと</sup>にとっては、この学園に編入してから迎えるはじめての秋。かすかに身を震わせながらベッドに上り、パステルブルーのカーテンがかけられた出窓から外を眺めると、空はうつすらオレンジ色がさし始め、ムクドリの群れが一糸乱れず飛んでいる。

ここは良家の子息ばかりが集う名門寄宿学校。学園はまるで秘匿されるように木々に囲まれ、学生たちは都会の喧騒から完全に守られている。久人に割り当てられた寮室からは、外壁を覆うように蔦の絡まる校舎や併設された教会が一望できた。遠くに聳え立つ山々が、所々ほんのり黄みがかっているのをぼんやり眺めていると、徹夜続きでたまった疲労がいくらか癒される気がする。

久人はゆつくりとした動作でベッドを降り、キャラメル色のニス塗りが美しい木製のクローゼットのドアをあけた。中にはビニールに包まれたままの真新しい制服や運動着などがぎっしりしき詰められている。

口元に指を這わせながらしばらく考え込むように見渡すと、久人はようやく長袖のVシャツを手についた。目がチカチカするほど白い新品のシャツは、袖を通すとノリがしつかりきいていて手首の辺りがまだ硬い。編入してまもなく夏季休暇に突入したこともあり、部屋ではずっとだらりとしたHシャツやスウェットを着て過ごしていたからか少々窮屈だ。細かいチェック柄が施された紺色のスラックスを手早く履くと、机の上に重ねられた参考書を小脇に抱え、姿見で全身を一瞥してから部屋を出る。

(やっぱり長袖で正解だったな)

寮を出てすぐ、真横から吹くひんやりとした風が頬を掠め、久人はその場で身震いをした。校舎まで続く銀杏並木の一本道を足早に歩いていくと、革靴のかかとが地面を蹴る小気味のよい音が耳に届く。

編入たばかりの頃ほとんど僻地に追いやられたものだため息も出たけれど、今では学生たちのささやかな喧騒以外に野鳥のさえずりや木々の騒めきしか聞こえないこの環境を好ましく思っている。雑多なものが何もないから、頭の中がクリアになるのもいい。

ふいに足元から風に煽られて、足がもつれそうになりながら、久人は寮の方を振り返るように見やった。

(カーディガンも下ろせばよかったか……)

長袖のVシャツでも山裾の初秋には不十分だったと後悔しながら、久人は先ほどよりも少しだけ歩幅を広げて歩きはじめる。

丁度、寮と校舎の間あたりを過ぎた頃、ふと昨日届いた荷物のことを思い出した。好きなメタルバンドの新譜で数か月前からずっと発売を心待ちにしていたものだ。

いかついシルバーアクセサリーをした拳がガラスを叩き割り、あちらこちらに物が散乱した過激なジャケットのそれは、この学園には明らかにミスマッチである。木彫りのクロスの置物と並んで机の上に堂々と鎮座していると思うと何となく爽快で頬が緩んだ。

課題に追われていて、昨日は外袋の透明フィルムを開封する余裕すらなかった。人にも物にも興味の薄い久人にとって、唯一幼少期からずっと変わらず大好きで、触れられる時間を大切に行っているのが音楽だ。早く帰って、心行くまで音の波に埋もれたい。久人は再び寮の方をちらりと見やると並木道を駆け抜けた。

新校舎に着くと渡り廊下を通り、図書室のある旧校舎へ向かった。夏季休暇中になぜわざわざ行くのかと言えば、編入の遅れを取り戻すために与えられた課題用の参考書を返却するためだ。新学期がはじまれば、当然のことながら帰省から戻ってきた生徒たちで学内は溢れかえる。人ごみを極力避けるためにも、校舎内でこなせるタスクは今のうちに片付けておきたい。

そもそも、都内屈指の進学校からの編入で、塾や家庭教師のレッスンを毎日こなしていた久人が、編入早々課題に追われることになるのは露ほども想像していなかった。ミッシヨン系の学校だからか聖書の授業もあり、他の科目のカリキュラムも普通の高校とは違うらしい。追いつくために夏休みを丸々費やすことにはなつたけれど、なんとか合格ラインには届いていると思う。

久人はふと足を止め、差し込む夕日に目を細めながら窓の外を眺めた。グラウンドでは、運動部の学生たちが走り込みをしている。

編入時、担任教師から部活動参加は任意だと説明を受けるや、迷うことなく未加入を選んだ。特段興味が持てそうなものもなかったし、内申稼ぎの必要もなくなった自分には不要だと判断したのだ。砂まみれになりながら部活動に勤しむ生徒たちから視線を外すと、目にかかりそうな程ぼさぼさした黒髪がもさった自分の姿が窓ガラスに映っている。

同年代と比べると頭一つ分ほど高い体躯に徹夜続きでややこけた顔。伸びた前髪をかき上げてみると、父親譲りの高く通った鼻筋に眼窩が窪み、大きな瞳が光無く黒々としてみえる。

(……前髪って自分で切れるのか?)

酷い顔にげんなりしながら、毛先をくるくると摘まみ思案する。家に居た頃は月に一度、床屋が屋敷にやって来て、弟と順番に散髪してもらうのが当たり前の生活だった。

これくらいなら自己流で切れそうな気もするけれど、ただでさえ自分は周囲から注目を浴びている。どう見られようが構わないとは思うものの、あえてみっともない姿を晒すこともない。そのうち購買部内に併設されている床屋にでも行ってみるのが良いかと考えつき、久人は二階の隅にある図書室を目指した。